

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名：武井麗生 共同研究者：伊藤晋介

所属：世田谷区立松原小学校 記録日2022年2月

キーワード：緘黙傾向児童のコミュニケーション支援、物作りを通じた自己肯定感の向上

【対象児の情報】

○ 学年 小学校4年生

○ 障害名 ◎その他（選択制緘黙疑い）

○ 障害と困難の内容

① 話す

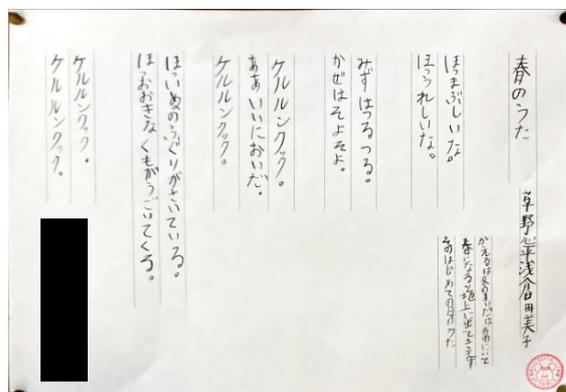
- ・2年生の夏休み明けから学校内では話をすることがない。筆談は行えないが、首を振ることで意思表示はできる。
- ・自宅ではよく喋り、知っていることや百人一首などを呟いている。
- ・自宅であっても自分の気持ちを話すことはほとんどない。

② 行動や性格

- ・以前、嘔吐した経験からか不安が高く、一人で給食を食べることは難しいものの、保護者がついていれば安心して食事ができる。
- ・運動会の練習ではかっこ悪い自分を見せたくないとの思いからか、みんなの前では練習せず、自宅で練習に取り組んで参加した。
- ・授業参加や時間通りの登校などは難しいが、本人なりに頑張って登校してきており、教室から出ていくことなどはせずに座って過ごすことができている。

③ 授業中

- ・ノートを取ることに抵抗があるが、授業を聞いて理解している。内容が難しくなってきたり、聞くだけでは理解できない部分が増えてきた。
- ・声には出さないが、読みに大きな課題はないようである。
- ・自分の感情表現が必要なものは心理的な抵抗が強く、取り組むことができない。聞いて理解する力は高い。繰り上がりのある足し算や、2桁の引き算などある程度の計算はできる。文章題などは正確に測れていないが、ゲームなどの説明書は多少複雑な計算が含まれていても理解できている。掛け算は 9×9 など特徴的なものや2の段まではすぐに答えられるが、苦手な段もある。漢字は苦手だが、前後の文脈からある程度推察して読むことができている。ただ、学年相当のものでも読みが分からないものもある。



④ 対人関係

- ・気持ちを周囲に伝えられないため一人ポツンとしていることが多い。
- ・嫌われている訳ではないが、他の子が声をかけると逃げたり嫌がったりする。
- ・自分のことや制作物を褒められることが苦手である。

⑤ 見通し

- ・忘れ物が多く、教科書類は全て学校に置いてある。重要なものは担任が保護者に直接連絡している。
- ・急な予定変更に弱い。新しいものや新しいことが苦手で、時間割をタブレットで撮影して確認している。

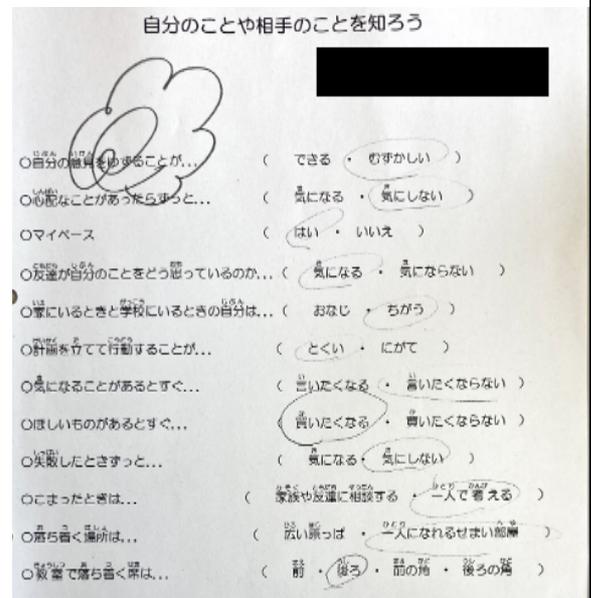
⑥ 得意なこと

- ・細かい作業が得意で、切り紙などをスムーズに作り上げる。
- ・恐竜、爬虫類、魚類など生き物にとっても詳しい。図鑑をよく見ている影響もある。
- ・野球を習っており、体のバランスが良い。



⑦ 本人の思い

- ・「学校は敵」と思っており、嫌なことが多いと感じている。
- ・友達からの目は気になるようである。



○使用した機器

- Pad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

- 当初のねらい
- ① 気持ちや考えを伝える方法を増やす
- ② 自分の得意なことを表現し、認められる
- 実施期間：2021年4月から2021年2月
- 実施者：武井麗生
- 実施者と対象児の関係：週1回2時間指導 特別支援教室（通級）担当教員として

【活動内容と対象児の変化】

○ 対象児の事前の状況

<困難の背景>

- ・自分のことを適切に理解してもらえないことで、安心して生活することができていない。実践者や他の通級教員に対する表情や接し方からある程度安心して関わられる教員が校内にいると考えられるが、通級教室以外の場所（在籍教室や通学路、休み時間など）で関わると緊張が高い様子が窺える。また、本児自身が「自分のことを理解している人はいない」と表現しており、本当の意味で安心できる他者は母親や兄妹に限られている。そのため、周囲との関わりを避けている傾向がある。
- ・生き物などの特定の知識や自分が知っていること、できることや考えを思うように表現することができていない。運動も得意な部類であるが、心理的な要因で体育の授業にも参加できていない。
- ・うまく自分の力を発揮できない環境によって自己肯定感が低下してきている。

<コミュニケーションの実態>

- ・首振りなどの単純なジェスチャーしか周囲と関わる手段を持っていないため、自分の気持ちや考えていることを周囲に伝えられた経験が少ない。
- ・我慢したり固まったりすることで困難を回避しようとするため、困った時に支援を求められず、解決できた経験が少ない。
- ・周囲の人はどう接したらいいかわからず孤立していることがある。

<学習面の実態>

- ・本人のこだわりや理由があって一斉授業への参加が難しい。
- ・耳で聞いて授業を理解していたが、学習内容が難しくなり、付いていけなくなっている。

【活動の具体的内容】

① 気持ちや考えを伝える方法を増やす

- 安心できる環境で会話のやり取りを楽しめるよう [DropStep] アプリの活用

② 自分の得意なことを表現し、認められる

- 得意なことを評価してもらい、自己肯定感を高める [動画制作] [紙工作] アプリの活用

③ 学習への抵抗感を軽減し、意欲を高める

- 代替手段によるノートテイクに取り組む [GoodNotes] [フリック道場] アプリの活用

【対象児の事後の変化】

① 気持ちや考えを伝える方法を増やす

- 安心できる環境で会話のやり取りを楽しめるよう [DropStep] アプリの活用

- ・首を振る以外のやり取りを増やすことで、コミュニケーションを成立させることをねらいとした。
- ・本人が一番安心して力を発揮することができる自宅において、やり取りを行った。
- ・取り組み初期ではスタンプを活用して反応することが主であったが、好きな生き物をクイズにすることで、フリック入力による文字でのやり取りも行うことができた。



※赤枠が本人

・本児の漢字の読みを支えるため、分からない漢字についてはコピーと検索を使って調べる方法を活用した。



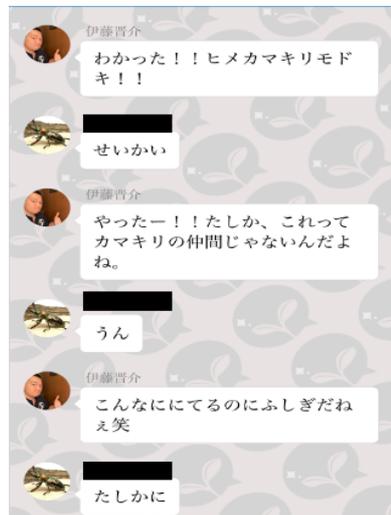
・クイズ以外の意思表示におけるやり取りでは大きな発展が見られなかったものの、自分からクイズを出題したいという予想を上回る意欲的なコミュニケーションが見られた。

・意欲的な生き物クイズを活用し、周囲へ発信することを試みた。最初こそ嫌がっていたものの、代わりにポスターを作成して掲示したところ見通しをもつことができ、自らも作成することができた。自分が作ったポスターへの他の人からのコメントを見て本人としても満足そうな反応が見られた。

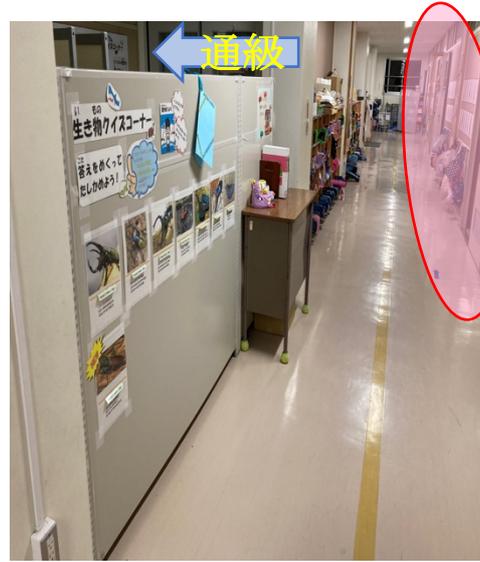
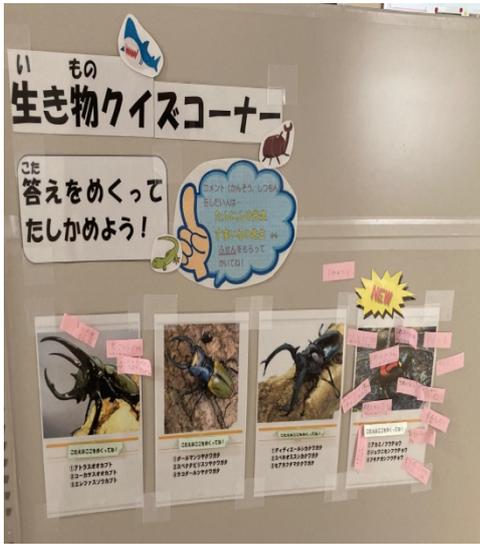


・協力者の教員（普段関わらない大人）が参加してクイズをやり取りするようになると、単純なクイズのやり取り以外でのコミュニケーションも見られるようになった。日常、直接関わらない大人が相手だからこそ取れたコミュニケーションであると考えられる。後述する取り組みが軌道に乗ってからは取り組み当初よりも大人とのクイズチャットの頻度に減少傾向が見られた。ポスターにより、他の児童への発信が可能になったことで大人相手への意欲が下がったためと思われる。

・他の児童とのやり取りは上述したコメントのやり取りに留まり、チャットやおしゃべりには至らなかったものの、周囲と繋がろうとする意欲を支えることができた。クイズを通して他の児童と関わろうとする気持ちが芽生え始めているため、今後は更に関わろうとする意欲を高めていきたい。



- ・生き物クイズのポスターは本人の意欲も高く、通常学級の児童（主に1年生）を対象に発信することにした。通級へ掲示していた時と比べると1年生が興味をもちやすいよう、クワガタムシなどの人気がある生き物を中心としたクイズを出題していた。たくさんの1年生がコメントの付箋をくれて、本人も定期的にクイズへのコメントをチェックするなど前向きに取り組むことができた。



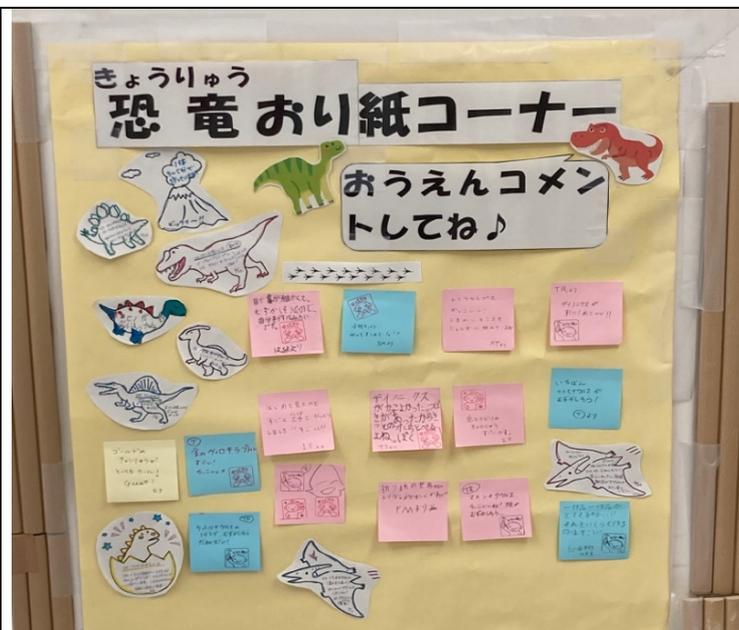
1年生教室

② 自分の得意なことを表現し、認められる

○ 得意なことを評価してもらい、自己肯定感を高める [動画制作] [紙工作]

- ・本児が得意としている野球の動画を作って他者に評価してもらうことを計画した。しかし、本児の意欲が低く、動画作成に至らず、計画を実施できなかった。
- ・本児が以前から作成していた恐竜の紙工作を、他の児童が見られるよう展示し、コメントを残すことができるよう特設コーナーを設けた。





- ・他の児童や、教員にコメントをもらい満足そうにしている様子が見られた。これまでに聴いたことがなかった鼻歌を歌っていた様子も見られた。
- ・2学期後半から、出来上がった恐竜の工作の一部を在籍学級に展示した。本人がこれだと思う作品をいくつか選択して展示することにした。学級の他の児童に興味をもってもらえたことは、本人にとって自分の力を発揮し、認められた良い経験となった。



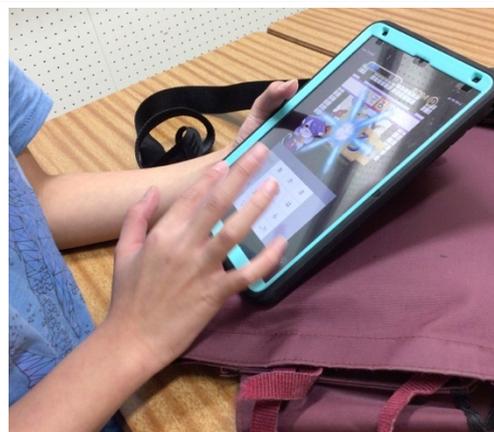
③ 学習への抵抗感を軽減し、意欲を高める

○ 代替手段によるノートテイクに取り組む

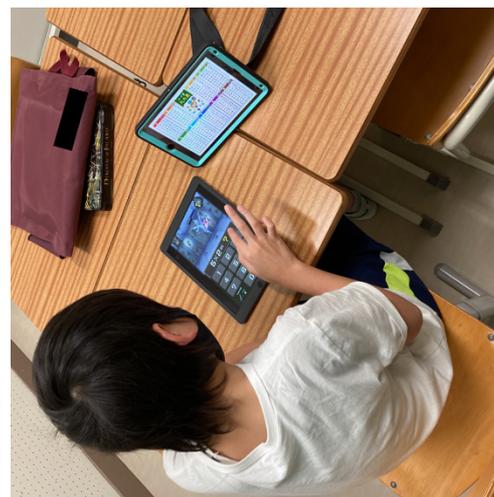
- ・聞いて理解するだけでは学習内容についていくのが難しくなっているため、手書きに代わる方法での学習方法に取り組んだ。
- ・ノートアプリでの学習参加に向けて、通級教室で練習したが“スムーズに入力できない”ということが引っかかっているようで、継続して挑戦することが難しかった。
- ・入力に慣れるため、タイピング練習に取り組んだ。アプリのゲーム性に最初こそ意欲が高かったものの、思うようにスピードが伸びないため、すぐに意欲が減退していった。チャットでのやり取りにはフリック入力と50音キーボード両方を活用しているようであったため、フリック入力の練習にも並行して取り組んだ。
- ・フリック入力の練習はタイピングよりも手応えがあったようで、通級での指導場面以外でも自ら進んで取り組んでいる。それによって入力スピードも徐々に上がってきており、在籍学級でのノートテイクに挑戦してみたいという気持ちは芽生えてきている。



- ・フリック入力を活用してのノートテイクに対しては意欲が高まってきたものの、他の児童からの目が気になるためか、なかなか取り組み始められていない現状がある。2学期の中頃から本人の心理状態が不安定な時期が続いたため、負荷の強い新しい取り組みは避けている。
- ・入力する力は徐々についてきているため、今後の学習場面ではGIGAスクール構想で導入されたタブレット端末も活用してノートテイクに取り組んでいく計画である。



- ・学習に気持ちが向いてきたようで、2学期後半頃から教員のタブレットに導入されていた四則演算アプリのモンスタータワーに自分から取り組むようになった。
- ・くり上がりのある足し算やかけ算など、繰り返して練習していないためか、未定着な様子が見られた。現在は九九表を片手に練習を行っている。
- ・当初計画した内容ではなかったが、対象児童自らが取り組み始めたため背中を押している。今まで足が向かなかった学習に対して少しずつ向き合うことができていると感じられる。



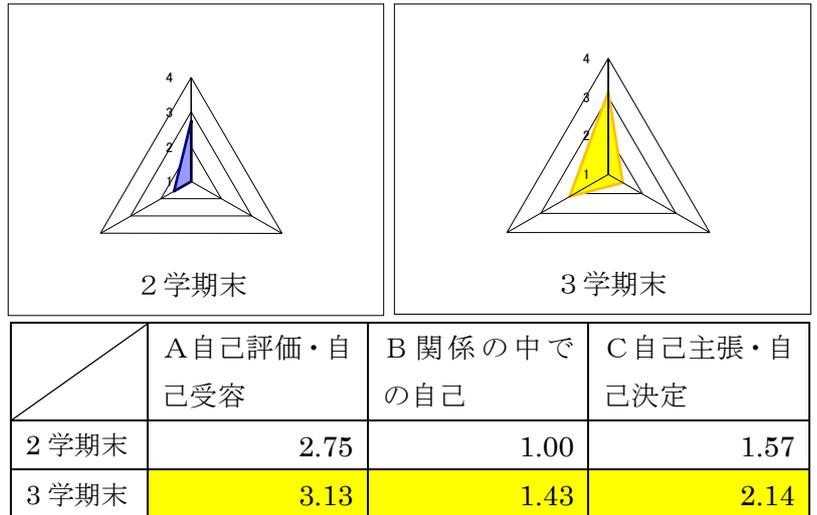
【報告者の気づきとエビデンス】

○ 主観的気づき

- ・できることを広げていくことに対してすんなりと了承する姿が増えた。以前は不安が強く、一度拒否することが多かったが、自分のもっている力を発揮することに対する抵抗感は軽減してきていると思われる。
- ・保護者によると、抵抗感の強かった登校は、以前ほど渋ることは減ってきており、楽しそうに登校してくるようになってきているとのこと。母親との分離もスムーズにできることが増えてきているため、安心して学校生活を送れるようになりつつあると考えられる。

○ 自尊感情尺度（東京都版）から見られる対象児童の変化

- ・自尊感情尺度を活用した本人の肯定感の変化は右図のようになった。いずれの項目においても改善が見られ、少しずつ自己肯定感や意欲が向上してきていることが窺える。
- ・4月当初から比較すると“B 関係の中での自己”の項目の伸びが少ないものの、他の人から認められた経験によって少しずつ向上してきていることが分かる。



○ エピソード

- ・2学期の中頃から、中休みに通級教室にやってくるサンドバッグを叩いたり、道具を放り投げたりする様子が見られた。行事などが詰まっていた時期とも重なっているため、練習に思うように参加できなかったりイレギュラーな変更が多かったりしたことも原因と考えられる。
- ・3学期に入り落ち着いてくると、VOCAアプリを使って他の子から笑いを取ろうとしたり、他の子の活動に参加したがったりと積極的に人と関わろうとする姿が増えてきている。

【今後の見通し】

- 学校で安心して生活できるよう、自分の気持ちを存分に解放できる場所や方法を今後も提供していく。
- 他者とのコミュニケーションを行う手段を広げ、より関わりをもちたいと思えるよう支えていく。
- どんどん難しくなっていく学習内容についていけるよう、現在取り組んでいる代替手段により、ノートテイクへの心理的なハードルを下げていく。
- 安心して関わることでできる友達や教員が増え、一緒に楽しく過ごしていく時間や活動・場所が増えていくことで、学校がもっと好きな場所になれるよう支援していく。
- 漢字の読みを支えるために取り組みやすい学び方を探していく。